



図版1『妖怪四季風俗絵巻』左から三月 二月 正月



図版2『妖怪四季風俗絵巻』左から六月 五月 四月

『妖怪四季風俗絵巻』

日文研「絵巻物データベース」(<http://lapis.nichibun.ac.jp/ema/>)より

2018年度に収蔵した作品で、妖怪たちが年中行事や季節にちなんだ風習を行ったり、遊びに興じたりしている様を、月ごとに描いたものである。巻末には「享保丁酉(1717年)初夏写 於清月庵南窓下 英一蝶(落款)」とあり、狩野派の流れを汲む絵師、英一蝶(1652～1724)が描いたものとされている。

では、それぞれに何が描かれているのかというと、まず正月は、妖怪たちが凧揚げに興じている。

2月は、梅見月の異名にちなんで、梅の紋の衣を着た妖怪が、白梅と黄梅の枝を入れた手桶を持って歩いている。

3月は、上巳の節句。人形(雛)を持った小さな妖怪が歩いている。

4月は、空高く飛んでいる雲雀か鶯らしき鳥を妖怪が追いかけている。

5月は、端午の節句。五月幟とともに兜と鎧の大袖をまとった一本足の妖怪が並び立っている。

6月は、夏越の祓え。身体を撫でた人形を川へ流して祓っている。

7月は、七夕。屋上へ飾られた竹に、天水桶(防火用の雨水を溜める桶)から顔をのぞかせた妖怪が短冊を飾ろうとしている。

8月は、仲秋の名月。杵を持った兎が臼を搗いている。

9月は、重陽の節句。居眠りしている狸をよそに、菊の模様が入った小袖を着た貉(貉菊紋という柄がある)が花生けの菊を眺めている。

10月は、神迎え。晦日に、出雲大社へ出向いていた神が帰還するのを、笠に蓑をまとった狐が松明を持って迎えに行っている。お迎えしているのは、おそらく稲荷だろう。神迎えの時には、天気が荒れるという。

11月は、着袴(いまでいう七五三)。袴を着けた幼い妖怪がお供を従えて歩いている。お供がつき、乳母が見送っているので、おそらくよい家柄の妖怪の子どもだろう。

12月は、節季候。節季候とは、羊歯の葉を挿した笠をかぶり、赤い布で顔を覆って、割り竹をたたきながら数人で囃して歩きながら、米銭をもらっている。腰には木槌と宝珠が描かれた布を腰に巻いて、縁起がいい。

この絵巻のもう一つの特徴は、土佐派で描かれるいわゆる「百鬼夜行絵巻」に登場する妖怪たちが何体か描かれていることである。本作は、「百鬼夜行絵巻」のパロディともいえる。この『妖怪四季風俗絵巻』は、妖怪が当時の風俗を嗜んでいる様をかなり早い時期に描いた作品で、妖怪の表現だけでなく、当時の民衆の風俗を考える上でも貴重な資料なのである。

(解説:木場貴俊)